

## 序

ここ何年かに書いた小文で、すでに編集されたものに『自分の畑』など三冊百二十篇があり、また『芸術と生活』の二十篇がある。このほかにあちこちに散らばっているものがまだいくらかもある。今年の夏休みに発心して整理し、もう一冊小冊子を編もうとした。集めてから一通り読んだ。いずれも細々した小品ではあるけれども、総数にして百五六十はある。一冊には収まりきらぬと思って、えいっという感じでそれらを“分家”させるしかなかった。そのうちいくらかでも文芸に関する四十四篇を選んで、別に一集とし、『談龍集』と呼ぶことにした。その他の百十何篇かを残してやはり『談虎集』<sup>i</sup>ということにする。

書名をなぜ「談虎」や「談龍」にするのか、そこにはどういう意味があるのか。その理由はとても単純である。わたしたち（厳密にはわたしと言うべきであるが）は好んで文芸を語る、実際にはやみくもに語るだけで、時には文芸そのものについてすらはつきり分かっていないのだ。ちょうどわたしたちは『龍経』を著したり、水墨の龍を描いたりするが、龍とはいったいどんなものかと訊かれれば、誰も見たことがないのと同じように。むかし葉公という人がいて、たいそう龍が好きで、部屋中に龍を彫ったり、描いたりするほどであったが、ほんとうの龍が降ってくると、彼は顔面蒼白になるほど驚いたということで、今に至るも人々の語り草である<sup>ii</sup>。わたし自身も多分そんな風に可笑しいのだろうと思う。しかし次のことはわたしにはよく分かっている。自分の語るのは根っからの偽の龍であって、しばらくでたためにそれを語っているに過ぎず、決して龍にお出まし願って雨を降らそうとか、龍涎香を一くれ得ようなどとは思っていない。誰かほんとうの龍を知りたければ、どうか參龍氏<sup>iii</sup>を訪ねてほしい。わたしのところには何もなければ、わたしには空談しかできない。いままた雲をつかむような龍の話になったから、その空談の空たることは無論推して知るべしである。

『談虎集』に収めたのは、あらゆる人事に関する評論である。わたしはもともと御史でも監察委員でもないから、守るべき官職もなければ、責任を持つべき言論もない。だから何もこんな余計な口をきいて我から面倒を起こすこともないのだ。わたしはただ話すのが好きなだけだ。文芸をあれこれ語るのが好きなように。関わりのないいろいろな事柄について、勝手な批評をしたり、注釈をつけたりして、その挙句はこの原稿の山だ。古人は言っている、虎を談ずれば色を変えずと。虎に出遭った人なら虎の話を聞けばもちろん恐るだろうし、たとえ出遭ったことのない人でも、虎のこととなるとびくびくせざるをえない。虎というものはほんとうに恐ろしいものであって、もともと軽々しく語ってはならないものである。わたしのこれらの小文は、たいていがいくらか人や社会の恨みを買っているもので、まるで虎の尾を踏んだような気がし、内心ではびくびくしがちで、大いに色を変えずる恐れがある。これがわたしが文集に談虎と名づけた由来であって、そのほかに別に深い意味があるわけではない。こうした文章は全体でたぶん二百篇以上あるだろうが、一部を削った。一半は時期遅れになったものであり、大半は個人にわたる議論である。わたしもそれらを集めて一本にし、「文壇」における戦功を表してもよいと思ったこともあるが、たちまちそういう考えを打ち消してしまった。というのはわたしの紳士の気性（わたしは

もともと中庸主義者なのだ) というものがやっぱり根深く、そんなことをすれば自分から値打ちを下げるだけだと思われたので、孔仲尼の削除の故事に倣うことに決めた。それで広告までした『真談虎集』は有名無実と相成った次第である。

『談龍』『談虎』二冊の表紙の絵は、どちらも古い日本の画家光琳(Korin)のものから借用したもので、『光琳百図』の中にうまい具合に二幅の絵があつて、龍と虎が画かれていたので、それを応用して、人に頼んで別に描いてもらう手間を省いた。——『真談虎集』の図案<sup>iv</sup>はもともと早くから考えがあつて、後の『甲寅』の、木鐸の中の黄色い毛をした虎を借用するつもりであつた。いま計画は中止になつたけれども、この巧妙な応用法はなかなかうまく考へてあつて、すててしまうのもいささか惜しい気がするので、ここに付記しておく。

民国十六年十一月八日、周作人、北京苦雨齋にて。

※初出：1927年11月『文學周報』第5巻第14期

---

<sup>i</sup> この序は『談龍集』と『談虎集』に共通の序である。その間の経緯については『談虎集』序の注を参照されたい。

<sup>ii</sup> 葉公の話 劉向『新序』卷五「雜事」に見える。

<sup>iii</sup> 豢龍氏 龍を飼つたという伝説の氏族名。

<sup>iv</sup> 『真談虎集』の図案 周作人は「後の『甲寅』」と言うが、『甲寅週刊』の表紙は、次に掲げる通り完全に先の『甲寅』を襲つたもので、色調までほとんど変更がない。彼はその頃紹興にいたから先の『甲寅』を見る機会もなかったのだろう。

